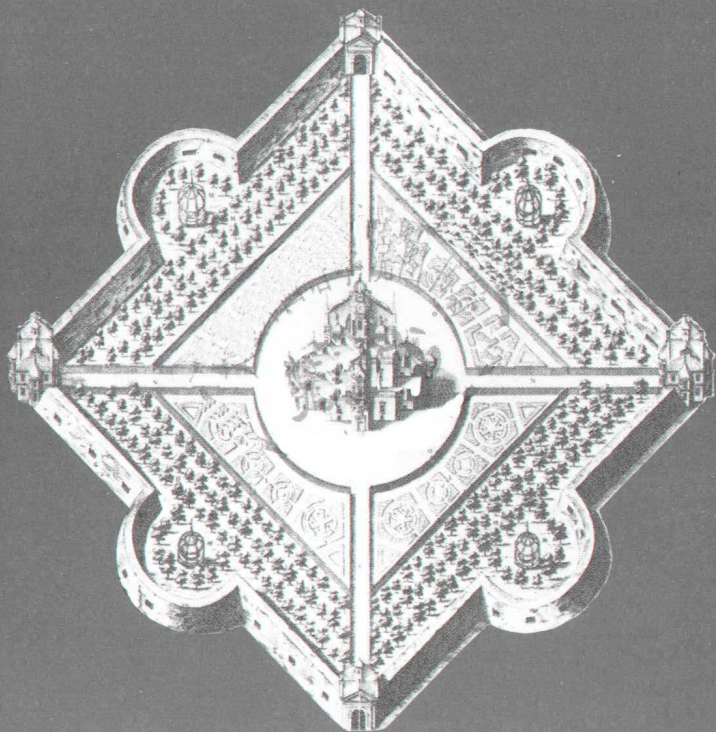




珠玲瓏館

塚本邦雄



文藝春秋

綠珠玲瓏館

一九八〇年二月十五日 第一刷

二七〇〇圓

著者 塚本邦雄

發行者 杉村友一

發行所 株式會社 文藝春秋

郵便番號一〇二 東京都千代田區紀尾井町三一二三

電話 東京(〇三)二六五局一二一一番

印刷—精興社 製本製函—大口製本

萬一落丁亂丁の場合はお取替へいたします

© Kunio Tsukamoto, 1980.

Printed in JAPAN

綠珠玲瓏館

目次

含羞の辭

- ① 雉食へばましてしのばゆ^{*}再た娶りあかあかと冬も半裸のピカソ
- ② サン・セバスチャン繪の中にひたすらに水欲り水の上ゆく椿
- ③ 鷺鳥卵つめたしガルガンチュアの母生みしババイヨ國の五月雨
- ④ 馬は睡りて亡命希ふことなきか夏さりわがたましひ滂沱たり
- ⑤ 夏至のひかり胸にながれて青年のたとふれば錫のごとき獨身
- ⑥ アヴェ・マリア、人妻まりあ 八月の電柱人のほひに灼けて
- ⑦ 孔子に随ふ處女ありしや 心冷え牛乳^ちを晩夏の水もて淡^{うす}む
- ⑧ 體育館まひる吊環の二つの眼盲ひて絢爛たる不在あり
- ⑨ 採油塔の脚しなやかにむらがるるバクーとぞ死後の蜜月の町
- ⑩ 金礦貨車かたへ過ぎつつ 喫泉に口づくるわれはかりそめの死者

⑪	揚雲雀そのかみ支那に耳斬りの刑ありてこの群青の午 ^{ひる}	49
⑫	暴動鹽のごとくあたらし剛毛のツエツツエ蠅棲む國の處女に ^{をとめ}	52
⑬	乾葡萄の陽の味ふくみつつ視入るレスリングひめやかに喘げり	55
⑭	黑人オルフェ　こころの夏に百人の競走 ^{レース} の自轉車の腎熱 ^{あつ} し	58
⑮	婚姻のいま世界には數知れぬ魔のゆふぐれを葱刈る農夫	61
⑯	硝子屑硝子に還る火の中に一しづくストラヴィンスキーの血	64
⑰	黒き臉のうちに眞晝の果 ^み を埋めて奔馬性結核の若者	67
⑱	父に愛されたる記憶わかつべし母よ雨中のかわける木賊 ^{とくさ}	70
⑲	壘 ^{ちうきやう} の辣蕪 ^{らくわう} 天に首よせつつ死する五月、大人國 ^{ブロンディンダナ} に友欲し	73
⑳	醫師は安樂死を語れども逆光の自轉車屋の宙吊りの自轉車	76
㉑	五月來る硝子のかなた森閑と嬰兒 ^{みどりご} みなころされたるみどり	79
㉒	假死の蠅蒼蒼と酢の空壘 ^{かみよわれふかきふちより} に溜め　de profundis...domine	82

- ②③ 出埃及記とや 群青の海さして乳母車うしろむきに走る
 ②④ 男色より酔よりさびしきもの視つめ醫師のひとみのうちの萬縁
 ②⑤ 花傳書のをはりの花の褐色にひらき 脚もていだかるチェロ
 ②⑥ たましひの夏いくたびか影斷きれてプールの底までの鐵梯子
 ②⑦ 夫婦と犬つめたき葡萄かこみをり あやふくボルジア家に連なりつ
 ②⑧ 眠る家族の脚入りみだれ峽灣フィヨルドのぎざぎざの死への遠さと近さ
 ②⑨ 路割れ蒼き水噴けるかな やすやすと極刑の一つなる娶りして
 ③⑩ むかし天幕職のカヤーム かたつむり料理濃きなみだの味に冷ゆ
 ③⑪ 橋より瞰みおろしし情事、否かたむきて鋼はがねのくづをはこぶ船あり
 ③⑫ 土曜日の父よ枇杷食ひハルーン・アル・ラシッドのその濡るる口髭
 ③⑬ あたらしき墓建つは家建つよりもはれやかにわがこころの夏至
 ③⑭ 祝婚のここより見えて隧道トンネルに入る貨車つひのすみかのひかり
- 118 115 112 109 106 103 100 97 94 91 88 85

- ③⑤ 葦の花 子をあまた有つ道化師の緋にぬりし口わづかにわらふ
- ③⑥ 釘、蕨、カラを買ひて屋上にのぼりきたりつ。神はわが櫓
- ③⑦ 鼻梁ジッドに肖し父のため立棺をおほふ からすみいろの麻布もて
- ③⑧ 幼帝弑さるるなつかしも先づ赤き竈より幼稚園建ちはじめ
- ③⑨ 神にも母にもかつて跪きしことなしサッカーの若者の血噴く膝
- ④⑩ シエーンベルク祭ヘナポレオンへの頌歌もて畢り紅き椅子の屍は充つ
- ④⑪ 夏の鹽甘し わが目の日蝕といもうとの半身の月蝕
- ④⑫ 好漢の未婚の眞夏 蚊紺の藍いろの蚊を身にちりばめつ
- ④⑬ 赤きアポロのしるしの下に若者は給油せり疼みもてそれを享く
- ④⑭ 旱天の地上の核として母が緋の洋傘の圓天井を支ふ
- ④⑮ カフカ忌の無人郵便局灼けて頼信紙のうすみどりの格子
- ④⑯ 悪友のひるねの膺に一つぶの葡萄を填めて去る 聖母月

154 151 148 145 142 139 136 133 130 127 124 121

- ④⑦ いもうとよ髪あらふとき火あぶりのまへのジャンヌの黒きかなしみ
 ④⑧ 少年蝶を逸せり さはれ一瞬を漆黒のヒットラーの口髭
 ④⑨ 慾望われとひとしからねば若者は先行す 茱萸の苗わしづかみ
 ⑤⑩ 黒きパイプの果ての喫泉接吻のさまにむさぼり死ぬまで黒人
 ⑤⑪ 電工の濃紺の脚天窓に仰ぎ見つ 快癒と瀕死のさかひ
 ⑤⑫ 鐵線の尾に猩紅の標結ひてトラック疾驅せりフロイト忌
 ⑤⑬ 復活祭まづ男の死より始まるといもうとが完膚なきまで粧ふ
 ⑤⑭ 暴動のモテーフとして風中の向日葵 脚あらば奔りださむ
 ⑤⑮ 愛慾に賭くる友らの義しきを交響樂百一番「時計」
 ⑤⑯ 芍藥と半音階と麴包の耳愛し銀婚の日の惡伴侶
 ⑤⑰ 氷塊のうちのうす緑の地獄・未婚のテネシー・ウィリアムズに
 ⑤⑱ 暗きよろこび愛人の犬仔を生みしかば死神と名を贈りたる

190 187 184 181 178 175 172 169 166 163 160 157

- 59 われの悦樂よろこびに隣りて全身の釘ひえびえと建ちゆく禮拜堂
 60 薔薇、胎兒、慾望その他幽閑しことごとく夜の塀そびえたつ
 61 風のちまた百のテレヴィにマラソンの獅子奮迅のずたずたの獅子
 62 ペンシル・スラックスの若者立ちすくむその伐採期寸前の脚
 63 若者連れて芭蕉さまよふ北國の地圖の鐵道網のはつなつ
 64 六月の夜への挨拶「殺される美しいお婆さんおやすみ」
 65 ピレネー山脈戀ひて家出づ心臓のあたりわづかに紅き影曳き
 66 テレヴィに西部男の屍體夜夜視つめ處女をとめらがやはらかきたましひ
 67 長身の父在りしかな地の雪に尿もて巨き花文字ゑがき
 68 ラジオの「英雄」足で消しさてわれら寝む殺されて覺むるまでの睡りを
 69 肉桂の香と肉慾のかかはりのあやふし毆たれる馬の前
 70 金婚は死後めぐり來む朴はなの花絶唱のごと薬そそりたち

226 223 220 217 214 211 208 205 202 199 196 193

⑦1 照る月の黄のわかものの尿道のカテーテル**聖母哀傷曲

⑦2 一穂の錐買ひしかばかたへなる一莖のやはらかき妹

⑦3 寒泳の青年の群われにむきすすみ來つ わが致死量の愛

⑦4 ライターもて紫陽花の屍に火を放つ一度も死んだことなきみら

⑦5 禁慾きはまりしうつつに麥秋の麥うちなびき全絃合奏のごとし

⑦6 老婆に遅れわれにはるかにさきがけてつぼみもつ夏のなごりの薔薇

⑦7 卵黄吸ひし孔ほの白し死はかかるやさしきひとみもてわれを視む

⑦8 わかものの病む眼のなかのひるの星*** L'aclos, L'Isle-Adam, Louÿs,

Lawrence

⑦9 夕顔乾酪色にくさりて惨劇のわが家明くるなり*おはやう刑事!

⑧0 壯年緩徐調にすぎさりつつを火の色のラベルの音盤のカラス

⑧1 ラ・マルセイエーズ心の國歌とし燐寸の横つ腹のかすりきず

259 256 253 250 247 244 241 238 235 232 229

- ⑨2 あはせかがみ 合鏡の蒼の世界に鬚剃ればわれとワグナーの逢ひかず知れず
 ⑨3 罌粟^な薙ぎて血ににじむ地視^{つち}つめぬるわかもの口のわぐねりすむす
 ⑨4 なまぐさきもの満ち百の花きざすあぢさゐの心電圖を撮れ！
 ⑨5 獨活^{うど}刈ればあをきにほひをそのかみのほほゑみて死をたまはる從者
 ⑨6 植林の縦あたらしき創もちて立てり 雨中の百人の處女
 ⑨7 果鋪に求むる若者の頭^づと兩肢とくれなるの飢ゑ明日につづけよ
 ⑨8 娶りはとほき奇蹟なれども帆柱を神として若き漁夫ねむるなり
 ⑨9 少女ふたばよりかんばしくかなかなの啞刺し殺す夏至物語
 ⑩0 ほととぎす わがわかものに庭訓^{ていきん}の Whitman が花のごとき鬚
 ⑩1 芍藥置きしかば眞夜の土純白にけがれたり たとふれば新婚
 ⑩2 理髮店まひるとさして縛^{いまし}めし青年の皮剥げる火曜日
 ⑩3 杏は鍋に煮ただるる時うらうらと球乗りの癡^{おろ}かなるをとめらよ

295 292 289 286 283 280 277 274 271 268 265 262

⑨4 繭煮つつゑまふいもうとまへがみのうづゆるやかにわれを殺めよ あや 298

⑨5 死せる蠶のごとちははのあひに臥す處女懷胎のあをきくもり日 301

⑨6 ある日婚姻 わが放ちたるわかもの背の紋章の鷹の羽ちがひ 304

⑨7 轢死あれ 轢死あれ われは屋上に蜂の巢の肺抱きて渴くを 307

⑨8 雉子の頸藍に冷えつつ すみやかに汝の欲するところをなせ 310

⑨9 オートバイの群は駈け去る羸皮あらかはの襟ひややけき青髭のすゑ 313

⑩0 コルドバの牝牛の皮の靴ひずみ父あゆむうつくしき惑ひの齡とし 316

縦 半音階的ワグナー論 319

玲瓏館縁起 331

綠珠玲瓏館

裝幀

政田岑生

含羞の辭

「綠」に執著耽溺してゐた一時期があつた。否それは幼時から私の關心を引いてやまぬ色であつた。ものごころもつかぬ頃、「紅」と呼ぶ水引がどうして暗綠色に底光りし、それに觸れると汗ばんだ掌が眞紅に染まるのかを訝しんだ。京紅を濃く塗つた唇は「玉蟲色」と言はれ、赤インクを水に流すと綠金の油紋が泛んだ。赤陽に一瞬眼を灼き、瞑つた時臉の裏には綠の殘像があつた。カラー・フィルムを透かすと綠の血がしたたつたやうに椿が咲き、六月の赤い森には嬰兒が綠の舌をひらめかす。補色の原理を知つたところで、決して解ける謎ではない。綠光と赤光、紫光と黄光は、かたみに重なる時、「なにゆゑ」白光

に變らねばならぬのか。

緑は交通信號の「進め」、すなはち安全の色であり、健康と生生發展の象徴色相、同時に毒藥のマークであり、特殊な愛の暗號であるところが面白いと、歌集上梓當時示唆してくれた友人がゐた。私はその時、緑は必ずしも「進め」ではない。それまで止まつてゐた人が、そのままでも差支へないし、進行中の人は止まらうと進み続けようと構はない合圖であり、安全と言ふよりは「任意」「自由」を濃く含む色相なのだと、心の中で呟いた。毒藥のマークは緑である以前に罇體の方がポピュラーであつた。緑を採用したのは多分「緑青」と「青酸」の觀念聯合であらう。「緑酒」はそのまま「美酒」の謂であり、また「緑字」は瑞祥を記す文字のことである。一方「緑林」が盜賊の別稱であり、「緑窓」を婦女の居室とするのもここにいくい。「緑」は深く廣い。「緑眼」は濃い藍色の瞳であり「緑髪」は漆黒の髪的美稱だ。空も海も「碧」であり、青葉・青山と一つになる。

「U、天體の周期なり、蒼海原の神さびし揺蕩、／點々と家畜の散りぼふ 牧の平和 學究の／廣き額に 煉金術の祕法の刻む 小皺の平和。」（鈴木信太郎譯）

ランボオの詩篇「母音」の一節である。彼はAⅡ黒・EⅡ白・IⅡ赤・OⅡ青とし、普通なら黄とするであらうUに緑を嵌めてゐる。しかも、Aが黒い胸當、Eが繖形花、Iが